

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32695

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12970

研究課題名（和文）近世社会における「中江藤樹像」の形成

研究課題名（英文）Creating the "image of Toju Nakae" in early modern society

研究代表者

高橋 恭寛 (Takahashi, Yasuhiro)

多摩大学・経営情報学部・准教授

研究者番号：70708031

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、江戸期における藤樹学派や世間で出回っていた書簡集や諸著作を調査することで、同時代に「中江藤樹の教え」がどのように共有されていたのかを分析した。結果、ほとんどの書簡集の写本が同系列の写本、もしくは刊本であった。個別具体的にまとめられた書簡集はなく、藤樹学派内で共有されていた書簡集と、出版されて世間に流布していた刊本とがあったのであり、学派内の学びの同質性を示唆する結果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の我々は、『全集』など校訂を経たまとまったテキスト群から読み取れるものを読み解こうと試みる。そのようなアプローチからでは、パッケージ的に「思想」を理解してしまう危険性がある。本研究課題が明らかにしたように、どのような媒体で江戸期を通じて継承されたのか、というところを改めて解きほぐして各テキストの特徴を捉え直そうとしたところに、儒学思想研究における学術的意義と社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we analyzed how the "teachings of Nakae Toju" were shared in the same period by surveying the Toju school and various collections of letters and other works circulating in the public domain during the Edo period. As a result, most of the manuscripts in the collection of letters were from the same family of manuscripts or published books. There were no specific collections of individual letters, but rather collections of letters shared within the Toju school and published books that had been published and disseminated to the public, suggesting the homogeneity of learning within the school.

研究分野：日本思想史

キーワード：中江藤樹 藤樹学派 江戸儒学 教育思想史 日本思想史

1. 研究開始当初の背景

江戸時代初期の儒者・中江藤樹(1608～48)は、中国明代儒学の一派「陽明学」を学び、江戸時代の段階で既に「日本陽明学派の祖」と称され、江戸時代の学問・教育に大きな影響を与えた日本儒学史における代表的人物である。学派内部でも藤樹没後30年ほどで既に『藤樹先生全書(岡田氏本)』を編纂しているように、江戸初期の儒者にも関わらず数多くの著作と書簡が現存している。

しかし江戸時代に『藤樹先生全書(岡田氏本)』は出版されず「藤樹学派」内部で共有されるのみであった。世間が学んだ中江藤樹の学問と、学派内部の先師藤樹の学問との間には隔絶があった。先行研究も「そもそも藤樹の思想的独自性とは何か」、もしくは「藤樹における陽明学的要素とは何か」というものが多数を占める。そのため、江戸時代に世間では中江藤樹の学問をどのような方向性の学問とイメージされていたのか、また、学派内部ではどのように共有されていたのか、問題関心に据えられたことはこれまでなかった。

2. 研究の目的

本研究課題では、世間に出回っていた藤樹の文集や書簡集などのテキスト分析を実施するなかで藤樹の思想を分析し、世間一般が抱いていた中江藤樹の学問と学派内部における藤樹の学問との差を描き出すことを目的とした。

それによって、江戸期における藤樹学受容の一端を解明することになり、ひいては江戸期以来の学問の再生産とはどのような実態に基づいておこなわれてきたのか、という考察に資する素材を提供することに繋がることを企図した。

そのように、専門学術がどのように語り継がれてきたのか、地域や専門学者の立ち位置の理解を深めることは、現代における専門学術の継承や普及などにも示唆を与えることが出来ると考える。

3. 研究の方法

まずは、刊本のみならず、各地に散見される写本などを対校・分析し、「共通する話題とは何か」を抽出することが課題であった。とりわけ書簡については、『藤樹先生全集』(岩波書店1940)の第2冊「倭書 解題並凡例」(337頁～368頁)に「代表的原本内容一覧表」によって、刊本・写本、それぞれの書簡集における書簡の重複度合いを、ある程度は把握することは出来る。しかし、それらの諸本は『藤樹先生全集』編纂のための対校であった。収録書簡全109通のうち、重複していない書簡、世間で出回った書簡・文集との内容的な差異に関する分析が必要とされているのである。

4. 研究成果

(1) 学派内共有テキストの整理

まず、そもそも学派内で共有されていた藤樹のテキストと、刊行されたものの区別が必要であった。藤樹の代表的著作を挙げると次のようなものがある。

主な著作
『原人』『持敬図説』『明德図説』『五性図説』『四書合一図説』『大学朱子序図説』
『首経考』『孝経考』『大学考』(漢文)『四書考』『読四書法』『大学序説』
『藤樹規』『学舎坐右戒』
『論語郷党啓蒙翼伝』『大乙神経序』『靈符疑解』『翁問答』『孝経啓蒙』
『大学解』『大学蒙註』『大学考』(仮名)『中庸解』『論語解』『中庸統解』
『鑑草』『春風』

これらの著作は、学派内部でも読まれていたものである。さらに『藤樹先生全集』には、書簡集が存在する。『藤樹先生全集』においては、「正編」「拾遺」「補遺」という三部に分けられている。「正編」は、江戸期に編纂された「藤樹先生全集(岡田氏本)」(以下、「全集」(岡田氏本))に収められた書簡集のことである。「拾遺」とは、「全集」(岡田氏本)にはないが、岡田氏(岡田季誠)が晩年にまとめた書簡集を、近代の『藤樹先生全集』に収録したものである。そして「補遺」とは、「藤樹先生全書遺教本」という写本に収録されていたものである。近代になって編纂された『藤樹先生全集』は、遺漏なく藤樹の作品をおさめることで藤樹の主張をより充実させることを目的としているため、それぞれの区別無く『藤樹先生全集』に収録することを試みたものであった。

一方、刊行された書簡集は以下の通り、三通りある。

(1) 『儒生雑記』(兵氏無謝序、1705年刊、大塚屋清兵衛)

(改題刊行に『心学文集』(丘思純序、1789年・1790年・1825年刊))

(2)『藤樹先生遺稿』(1795年刊、銭屋総四郎版・西村平八版)

(3)『藤樹先生手翰抄(附春風)』(今井久兵衛校正、1856年刊、和泉屋吉兵衛版)

これらの刊本と、「全集」(岡田氏本)と比較すると、当然、収録書簡に差がある。「全集」(岡田氏本)には収録されていて、『儒生雑記』には脱落している書簡も当然存在した。たとえば、「答岡村子」(2-391)、「答中村重二」(2-428)、「与池田子」(2-440)、「送岡村子」(2-445)などがそれである(『藤樹先生全集』からの引用は巻数-ページ数で引用している)。これらは、藤樹最晩年41歳のときの書簡であり、書簡のなかで「王陽明」に言及している書簡ばかり。しかも、藤樹が陽明学を奉ずるようになったきっかけについて自らが告げた書簡が含まれる。このようなところにも、世間一般で受容できる藤樹の学問と、藤樹学派内で学べる藤樹の学問との違いがあることが分かる。

(2) 書簡集の比較検討

上記のように、刊本の書簡集では、やはり藤樹の学問は我々が把握している藤樹学と異なるところがあった。

さらに刊行はされなかったが三宅石庵序『藤樹先生書簡雑著』は、当時、流布していた藤樹書簡集として知られていた。そのように考えると、まずは全国にある書簡集にはどのようなものがあるのかを調査する必要がある。これまで『藤樹先生全集』刊行のために参照された書簡集は表1の通りであるが、ここには上述の『藤樹先生書簡雑著』も加えられている。

これらとは異なる書簡集には、どのようなものがあるだろうか。本研究課題において調査した結果、表2のような書簡集を確認することができた。新たな刊本はなく、全て写本である。

ただし、中江藤樹記念館が所蔵している書簡集にかんしては、調査当時、資料を保管している記念館書庫は、長期整理中であったため、『藤樹先生全集』における資料が確認することのできる状況ではなかった。そのため、現在、記念館の調査によって確認した資料は、『藤樹先生華翰(天)』『藤樹先生華翰続集附録別集(地)』『藤樹先生書翰』の三冊を確認することができた。そもそも表1で提示された書簡集であるが、収録書簡の題目のみが挙げられており、同じ人物に出した書簡が複数通ある場合、どれが収録されているのか判別がつかない。そのため、書簡所蔵のこれら三冊の書簡集が、今後、藤樹書院において共有された書簡集として重視されていくこととなると考えられる。

それでは、表2の資料群を確認したところ、どれほど異同があったのであろうか。確認出来た書簡集のなかで、独自に編纂された書簡集は基本的に確認することはできなかった。そのほか、特異な書簡集はこれといって存在しなかったが、「16.藤樹先生答問書(筑波大学附属図書館)」のみは、藤樹高弟の淵岡山による書簡集「岡山先生書簡」(上中下全三巻)の中巻であることが判明した。藤樹書簡だとして共有されていたものの、実際は弟子筋の教えが「中江藤樹の教え」として伝わっていたことが窺い知れるであろう。ただし、現状、このような書簡集は一例のみであり、例外的である可能性も残している。

ただ、全国の書簡集調査によって、当初の想定以上に各書簡集が構成している書簡の類似があることが明らかとなり、藤樹学派内部での学習機会の均質性があることが窺い知れた。他方、刊本の書簡集と写本について、その構成書簡の異同についても確認したが、その取捨選択に大きな差は無かった。刊本で世間に流布していた藤樹の学問と、学派内部で共有されていた藤樹の教えとは、上述のような晩年の書簡がない、という点では異なるのであるが、全体的には大きな情報の差が無いと言える。

本研究成果によって学派内部で広まっていたと思われる写本の流布状況から、かれらの学びについて的一端が明らかになった。

表1『藤樹先生全集』参照書簡集一覧

1. 藤樹書翰
2. 中江先生教化状
3. 藤樹先師之華翰詠歌
4. 和翰
5. 藤樹先生書簡集
6. 藤樹先生全書遺教本
7. 儒生雑記
8. 蕃山先生手簡
9. 藤樹先生書簡写
10. 藤樹先生書簡雑著
11. 岡田季誠編藤樹先生全書倭文集二。
12. 藤樹先生全書
13. 藤樹先生書簡拾遺
14. 藤樹先生御書簡
15. 藤樹先生手簡
16. 藤樹先生手翰抄

表2 調査資料一覧

1. 藤樹書簡(中之島)
2. 近江聖人手簡(都立中央加賀文庫)
3. 中江氏書翰(金沢)
4. 藤樹先生書翰(阪大含翠堂)
5. 藤樹書翰(佐倉高鹿山)
6. 藤樹先生書牘(内閣文庫)
7. 藤樹先生華翰(杵築)
8. 藤樹先生書翰(内藤記念くすり博物館)
9. 華翰(初瀬川文庫)
10. 藤樹書翰(神宮文庫)
11. 藤樹先生書簡(書陵部)
12. 藤樹先生書簡雑著(活字・内閣文庫・刈谷図書館・筑波大学附属図書館)
13. 藤樹先生御書翰(都立中央)
14. 藤樹先生遺文(愛媛今治)
15. 藤樹先生書簡続集(内藤記念くすり博物館)
16. 藤樹先生答問書(筑波大学附属図書館)

これは一例のみであり、例外的である

(3) その他の「藤樹」関係資料

中江藤樹に仮託した教訓書に足立漁叟『続翁問答』という書があり、滋賀県高島市の有志の手によって翻刻がまとめられている。中江藤樹の『翁問答』を参考にして後世の者が著した教訓書であり、その方向性についても藤樹学との異同を考察した。タイトルの通り『翁問答』を参考にして、儒学思想をはじめとした中国思想的な概念説明をおこなっている部分と、『鑑草』を念頭に置いて福善禍淫を論じているような箇所もある。藤樹の思想的な影響という点では、たとえば、「明德仏性」という『鑑草』由来の用語が用いられているように、その儒学思想の説明の場面で藤樹の学問を念頭においていることも窺い知れる。

作者の足立漁叟は藤樹の地元近江高島の人であり、『翁問答』や『鑑草』を念頭に置いた一般的な教訓書として地域で受容されたと考えられる。刊本ではなく、世間に流布したかどうかは現状不明であるが、少なくとも『藤樹先生学術定論』を書いた石河定源が本書に言及をしていることから、学派内部では知られていた書と考えられる。ただ共有がなされていたものの、あくまで一般的な教訓書でもあり、藤樹学の学術思想の提示という面では、石河定源はそこまで高い評価をしていなかった。

ただ、近年に翻刻がなされたように、今なお藤樹の学問に親炙する地域の学習者たちにおいては、学問的意義のある可能性もある。現代的な学びの場という問題と絡めて、『続翁問答』のような後学が仮託した書籍についての学問的意義を考える現状について明らかとなった。

(4) 結論と今後の展望

藤樹学派では、『翁問答』をはじめとして、学祖・中江藤樹の著作を読み、藤樹の学問を学んでいた。それら著作と同様に、書簡集についても各地に類似の構成をとる書簡集が存在し、それらが基本的には刊本とは構成を異にすることから、学派内部の学びのひとつであると考えられた。刊本の広がりと同様交錯しなかったところを見ると、世間で共有された藤樹の学問と、学派内部での藤樹の学問との間には開きがあり、さらに『続翁問答』の内容と同時代的な共有状況を踏まえたとき、藤樹の学問の世間的な位置付けについては限定的であったことが窺い知れる。独自の視点からまとめた書簡集など、藤樹学の自覚的・積極的な受容の形式については、十分に確認できないことが今回の調査からは判明したが、それは逆に、藤樹学派における学びの共通性について示唆するものであったと言える。

これは、足立漁叟『続翁問答』のように、藤樹の学問を基点とし、通俗道徳を語る視点の登場からも窺い知れる。地域における学びが前近代から現代にいたるまで、どのような素材をもとに、どのようにして継承していけるのかについて考察する材料の提示にもなったと考えられる。

ただ、今回の研究成果によって、『藤樹先生全集』が「藤樹全集」(岡田氏本)を前提としつつも、そもそも「藤樹全集」(岡田氏本)の段階である程度、「藤樹の学問」についての方向性が定まっており、「藤樹全集」(岡田氏本)と、それ以後の「全集」編纂との異同についての理解が重要になってくる。

したがって今後の展望としては、そもそも「藤樹全集」(岡田氏本)における並びが、なぜ現状確認できるような形であるのか、他の「全集」や収集テキストとの対校の結果、どのような意図のもと現在の『藤樹先生全集』へと至ったのか、など全集の目次構成をはじめとして、全集編纂における編纂意志の考察ということが問題となってくるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋恭寛
2. 発表標題 徳川時代における中江藤樹の位置付けの再考
3. 学会等名 西安日本学研究会第13回月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋恭寛
2. 発表標題 江戸時代の学問と教育
3. 学会等名 北スマトラ大学オンラインセミナー
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋恭寛
2. 発表標題 徳川日本における『孟子』受容と論点
3. 学会等名 第73回日本倫理学会大会 主題別討議
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

「中江藤樹の 伝説化 と藤樹の学問」徳川家を楽しむ会第11回例会 2021年2月11日
「江戸期の儒礼と死生」2021年度多摩大学T-Studio公開講座2021年6月10日

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------